日韓の狭間で生きる

朴（パク） 一（イル）

ごく普通の大学教員をしていた私が、テレビの世界とかかわるようになったのは、今から一〇年前、ある討論番組に出演させてもらってからである。最初は、担当ディレクターに「竹島（独島）がなぜ韓国領なのか、韓国側の立場から説明してほしい」と言われ、自己主張は封印し、韓国政府の解釈を客観的に説明しただけだった。

ところが、放送日の翌日、大学には「税金で反日教授を雇うな」という苦情が殺到した。こうした苦情は現在も少なくない。それでも、私がテレビに出るのは、日本の人々に領土問題や歴史認識に対する他国からの見方・視点というものを紹介したいからである。

もちろん、韓国人にも日本人の見方・視点を知ってほしいと思っている。そんなとき、私が日本で出版した本を韓国の外交通商部から翻訳出版したいという依頼があった。ところが、翻訳が終わって、韓国で出版される直前、韓国の外交通商部から出版にストップがかかった。理由は、本の内容が日本側の立場から書かれた親日的な書物で、公的財源では出版できないというものだった。

マスコミ受けしたいなら、日本では親日的な発言を、韓国では反日的な発言をすればよいのだが、日本と韓国の狭間で生きてきた私にはそれができない。韓国や日本のどちらかの国益の立場から発言するのはたやすい。だが、両国の利害が微妙に絡み合う中で、歩み寄るのは想像以上に難しい。韓国には韓国の、日本には日本の、それぞれ歴史解釈があり、そうした歴史解釈を前提にした領土認識があるからだ。少しだけ日本人が韓国の立場を理解する努力をし、韓国人が日本の立場を理解しようとすれば、日韓の歩み寄りはたやすくなると思うのだが、複雑ないきさつをもつ両国の歩み寄りは簡単ではない。

しかし、日韓関係を加害者と被害者、親日や反日、韓流や嫌韓流という二項対立の構図から理解しようとするのは、時代遅れだと思う。経済のグローバル化が進む中で、個人、企業、国家の利害はますます衝突する可能性を増している。グローバル化が進展するにつれて、存在感を失いつつある国家が自らのナショナリズムを強化しようとする時代であるからこそ、相互依存関係にある日韓が、相互理解を深めながら、互恵関係を再構築していく重要性は高まっている。今、両国に必要なのは、お互いに歩み寄る寛容さであると思う。

プロフィール
1956年兵庫県生まれ。在日韓国人3世。同志社大学卒業、同大学院博士課程修了。商学博士。現在、大阪市立大学大学院経済学研究科教授。著書に『在日という生き方』、『在日コリアンってなんでんねん』、『僕たちのヒーローはみんな在日だった』、『日本人と韓国人「タテマエ」と「ホンネ」』（いずれも講談社）などがある。一昨年、『在日コリアン辞典』（明石書店）の編集・出版で韓国国務総理表彰を受けた。

月刊 みんぱく 6月号目次

1 エッセイ　千字文
日韓の狭間で生きる
朴 一

2 特集
朝鮮半島の文化

2 マトリックス展示！
——新しい「朝鮮半島の文化」展示　太田 心平
4 食から見る植民地期　朝倉 敏夫
6 植民地期にもちこまれたモンペ　李 大和
7 生活リズムを作る時間と近代化　澤野 美智子
8 「ノリ」ってなあに？　髙 正子
9 「いる、つなぐ」——韓国の外国人支援　ベル 裕紀

10 集めてみました世界の〇〇
ボードゲーム編

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
無形文化遺産をめぐる認識
——エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ
川瀬 慈

16 多文化をあきなう
綿花の有機栽培とフェアトレードは両立するか
牧田 りえ

18 味の根っこ
リュテニツァ
マリア・ヨトヴァ

20 人間学のキーワード
クィア
新ケ江 章友

21 異聞逸聞
ヤマトと琉球のはざまで
前田 達朗

22 制服の世界、世界の制服
曼荼羅をまとい宇宙になる
大内 典

24 次号予告・編集後記